# 海蝶ノート 18

# 「幻の冒頭」は試験研究センターの「正義仁愛」

吉川英梨

前回の「海蝶ノート」はちょうど3月11日号だったので、東日本大震災と気仙沼について書かせていただきました。

本日からまた時系列を2019年の『海蝶』執筆前に戻し、取材の裏話を書いていきます。

ところでみなさん、『海蝶』の冒頭を覚えていますか。東日本大震災が起こる2011年3月11日の午後2時46分直前までの、主人公・忍海愛の日常を書きました。

当初、震災と主人公を絡める設定ではなかったので、実は全く違う冒頭を予定していました。

その「幻の冒頭」の舞台だったのが、今回取り上げる、海上保安試験研究センターです。

私は海上保安庁という海を守る組織の施設が、東京都立川市という内陸部にあることを知りませんでした。改めて海上保安試験研究センター周辺を見ると、陸上自衛隊の駐屯地から警視庁、東京消防庁の関連施設が建ち並んでいます……思い出した！

「シン・ゴジラで、永田町がやられたときに政府機関を移設した場所だ！」

いわゆる、立川広域防災基地です。当時の萩中広樹所長の執務室にお招きいただき、早速、取材開始です。警察小説を書いている私は警視庁と比べながら海上保安庁の組織図を理解しようとする癖があります。

（警視庁でいうところの本部鑑識課かな？）

しかし海上でなにか鑑識作業が必要な事案があったとき、現場で鑑識作業をするのが試験センターの方ではなく、巡視船に乗っている海上保安官だと聞き、びっくりです。

左から筆者、萩中所長、山﨑試験研究官、柴崎鑑定調整官＝2019年7月（肩書きは当時）

「海上保安官は船を動かすし、人も助けるし、火が出たら消火もする。犯人も逮捕すると思ったら鑑識作業までやるのか！」

と心底感心いたしました。

「これが海上保安官は何でも屋と言われる所以なんですよ」と同行していた海上保安協会の宮野直昭常務。すると海上保安試験研究センターは警察で言うところの科学捜査研究所みたいなところかしら、と想像したところで、試験研究官としてご活躍の山﨑ゆきみさんのご登場です。これはもう私の中では『海上保安庁の榊マリコ』です。後に山﨑さんは人事院総裁賞を受賞なさった上、『科捜研の女』の沢口靖子に負けない美しい方。ド文系の私に施設内のことを親切に教えてくださいました。鑑定室では鑑定調整官の柴崎牧男さんに顕微鏡の中まで見せていただき、船舶のペンキの破片を鑑定する過程をじっくり教えていただきました。

さて、私がなぜ『海蝶』の冒頭を立川の海上保安試験研究センターに据えたのか――。萩中所長から聞いたある逸話がもとになっています。

私が取材訪問する1カ月前、所長室の目の前の飛行滑走路で自衛隊のヘリが不時着、横転する事故があったとのこと。

萩中所長はすぐさまセンター内の海上保安官と共に担架をかついで救助に行ったといいます。

相手は機密の多い自衛隊ヘリです。上司の命令を待った方がいいのか、自衛隊内部での事故処理に任せた方がいいのか……。事実、北の消防も南の警察も、救助を躊躇（ちゅうちょ）していたと言います。

そんな中、まずは人命救助だとヘリに向かったのが海上保安庁の職員だけだったとのこと。海上保安官の、組織の壁も上下関係の壁も無視した、「人を助ける」という純粋な人命救助意識の高さに、心から感動しました。

これぞまさに「正義仁愛」。

海上保安官に根付くこの意識が非常にわかりやすい形で出たエピソードだなと思い、『海蝶』の冒頭に使用したのです。その後のプロットの変遷で震災を扱うことになり、この冒頭は泣く泣くカットしたのですが、この先執筆予定の海保小説でいつか絶対にこの場面を登場させたいと思っています。（つづく）

＝次回は4月15日号

## まずは人命救助と不時着ヘリへ